

「百瀬文さんと村田紗樹さんの作品について」 vol. 3

収録日：2013年2月20日

収録場所：switch point

参加者：百瀬文×村田紗樹×森田浩彰×永田絢子×富井大裕

進行：末永史尚

(音楽)

(音声フェードイン)

末永「逆に、その、村田さんから百瀬さんの作品ていうのはどういう風に見えたのかな？」

村田「私は、その、あの、ま、まず百瀬さんがあのtwitterとかFacebookで、あの告知をしてたじゃないですか。聴覚障害の方と対談、あのインタビューをして作品にしたって。それをみて、『あ！かぶった！』とおもって(笑)」

一同「「(笑)」」

百瀬「そうですね(笑)」

村田「ムサビを観に、ムサビの卒展を観にいくつもりだったんですけど、これで観に行ったら確実に影響を受けてしまうと思って、観に行かなかったんですけど。その状況を、その、卒展のときの状況を見てないのでわからないんですけど。」

百瀬「ま、でも普通にこういう空間に、まあ、当たり前にかこう投影されているだけで。特にそういう、なんか、入るまでこういう、なんか、壁をつたって行かせるとかじゃなくて、ふつうに。「じゃ、次の回でーす。」ってみたい感じで私が「入ってください」っていう、だけ。最初から見ることは義務づけられていたっていう以外は、特にそんなに変わったことはない。」

村田「お客さんの反応とか、がけっこう、映像も見るけど、その映像に付随するお客さんの反応とかも、私は結構気になる、ので。ちょっと気になる、ま、あの、優秀賞展ってあるんですけど、4月に、それは観に行こうと思ってんですけど。まずその映像を観て気になったのが、.....作り手として興味があったのが、どこまで考えてしゃべっているのかっていうところ。どこまで考えておいて、どういうことをしゃべろうと思って。けっこうその、なんだろう、しゃべっていくなかで、なんだろう。えーと、...さっきその、ビデオレターに、」

百瀬「うん。」

村田「同じ構造で、」

百瀬「うん。」

村田「作品を、あの...同じ構造で、百瀬さんが、えっと、別の言葉を、別の声でしゃべっているのに、文字情報では、あ、口話では、口の形では、わかるように。」

百瀬「そう、話してる内容は違うんですけど、扱ってる構造は一緒。」

村田「で、その、話してる、その、今回の作品の映像の中で、話してる内容っていうのが、えっと...、ちょうどその.....、コントロールがすごいされてるなと思って。そのコントロールとその内容と、話していく内容と、その切り替え方、っていうのをどこまで設定しているんだろうっていうのを思って。」

百瀬「その、私のしゃべっている台詞に関しては、私は全部台本を、」

村田「あ、台本、はい。」

百瀬「つくっていて。まあ、泳がせている部分もあります、もちろん。だからサンマのくだり。明石家さんまのくだりとか（笑）。あの辺はけっこう、まあ（笑）。」

末永「そこ台本があったらすごいよね。（笑）」

一同「「（笑）」」

森田「サンマ？って。（笑）」

百瀬「その辺は大筋は私のなかではだいたい決めてて。ていうか私はあの、でたらめな言葉をしゃべってるんですけど、あれはもちろん全部暗記できているわけではなくて、木下さんの後ろにはカンペが貼ってあって。」

村田「ああ～。そうなの。」

百瀬「木下さんには見えないけど私はそれを見ながらしゃべれる状況にはなっていて。」

末永「あー。」

百瀬「だから次こういう質問をするっていう順序は私のなかでは全部決まっています。で、その、」

村田「じゃあ、」

百瀬「すみません。でなんかその会話の内容も、その、渋谷のカフェで筆談でしゃべった内容をベースにつくっているの、以前トピックに出たものを再び質問しているので、木下さんもだいたい『あ、これ前も聞かれたな』って感じで答えやすいようにはなっていると思います。」

村田「うーん。...そうなんですね。...じゃ、もう完全に作り込んでおいて、これであの、割ともう木下さんの方にも、ま、台本はなくて、百瀬さんの台本どおりに話された言葉に対して答えてるんだけど、木下さんはコントロールしてるようなところがあるんですね。」

百瀬「そうですね、木下さんも、なんか、おそらく『こういう内容をしゃべります』みたいなことはわかっています。でまあ、『別にアドリブしてくれて構いません』みたいなことは伝えてあって。」

村田「...その、こん、私は今回、その作品で、ほんとうに行き当たりばったり、行き当たりばったりというか、...質問自体は考えてあったんですけど、あの、インタビューをしながら、話していきながら、あ、三回撮影したんですね。で、男性の方が一番最初にやって、盲者の方、盲者の女性の方をはさんで、で、もう一度その女性の質問、女性と話された、えーっと、会話をもとに、あの男性、あの聾者の男性の方とやるっていうことをしてて。か、完全にその、その場で話して、...こう、数珠つなぎに、会話を数珠つなぎにしていくっていうことをしていたので。コントロールというよりは私がこう、流されていたような状態。」

百瀬「伝書鳩みたいな役割（笑）。」

村田「そうですね（笑）。そこ、結構、逆なんだけど。逆というか、...そうですね、逆だなと思って。コントロールは、私は、多分ほぼ出来ていない状態でやっていったので。...最終的に、その、編集するときに、自分でこう、あの...、こことこっていう所を見つけて、で、徐々にこう、自分の中でつなぎあわせていくという作業だったので、最初から、あの、決まっていたわけではなくて。」

百瀬「うん。.....やっぱ私の場合はその編集を、その、台本というか、その、どういう質問で、どういう順番で質問するかみたいな、ことを撮影の前段階においていて。まその、渋谷のカフェで、ま、でっかいスケッチブックを開いて、まあ、ふたりで筆談したんですけど。ま、あとでそのスケッチブックを読み返して、こ

の質問の次にこの質問をつなげよう、みたいな感じで、そこで編集をしてるっていう感じでした。」

村田「うん、うん。」

百瀬「もちろん映像になった...ものを見てから編集している部分もあるんですけど、基本的な順番は変わっていないんです。」

一同「うん。」

富井「うんうんうん...。最初さ、番組みたいだよ、最初にね。」

百瀬「そうですね。何か、結構その、ライティングとか、私が着ているのとか、よくわかんないんだけど。ふふ（笑）。」

末永「あれ謎だよ（笑）。」

一同「「「（笑）」」」」

富井「やっぱりこうしてる感じのね、映り方とか...だいたい意識的なわけでしょう？」

百瀬「そうですね。」

富井「若干最初インタビューみたいなのが、どんどんどんどん何かずれておかしくなっていくっていう。」

百瀬「そうですね。」

富井「うん。」

百瀬「一応あれは私ができる限りのフォーマルな格好していると思います（笑）。ふっふっふっ（笑）。」

一同「「「（笑）」」」」

百瀬「ふっふふ（笑）。」

森田「フォーマルかなあ（笑）。」

百瀬「へへへ（笑）」

一同「「「（笑）」」」」

百瀬「うん。」

富井「なるほどなあ...。」

末永「あのライティングが気になったんだけど...。」

百瀬「はい。」

末永「あそこ、なんで、あそこまで落としていたんですか？割と、こう...暗めで、」

百瀬「うんうん。」

末永「まあ、ふたりがこう、向き合っている...正面から当ててんのかな？あれは、割と。」

百瀬「いや、45度ぐらい...。」

末永「45度。うーん。」

百瀬「そうですね、なんか単純に...なんだろうな、なんかひそやかな感じにしたかった。」

末永「あー。」

百瀬「したかったっていうみたい。絵画的な問題で。」

富井「そうだなー。NHKぼいんだよね！」

百瀬「あはは！」

一同「「「「(笑)」「」」」」

百瀬「NHKってああいうかんじ！」

富井「インタビュアーのインタビューみたいなので、アトリエに行く時とかって大体45度ラインだよ
ね。」

末永「あはは！」

富井「で、結構、首をかしげた...こう...女性が... (笑)。」

村田「あはは (笑)。」

百瀬「うん。」

富井「女性が。」

百瀬「うん。」

富井「なんか言ったところに対して、『え?』っていう反応だけいきなりこう (笑)、聞き手がアップになる
みたいな、」

永田「あー。」

富井「結構あって...、割と、そういう、こう、」

百瀬「うん。」

富井「本当に、本当にインタビュアーっていう感じの。」

百瀬「そうですね。まあ、私の中でのインタビュー映像のクリシェみたいな...なんか、」

一同「うん。」

百瀬「こと、なんですけどね。」

富井「そうだね。」

百瀬「絶対ずれたらどうしようって思ったんですよ (笑)。」

富井「俺は割とそこがそこフィットしていて、だからどンドンずれていくところが結構面白かった。」

村田「うんうん」

永田「なんかそういう意味でちょっと私も気になったのが、百瀬さんの映像でもなんか、例えば、手をこうやっている、組み替えるショットとか、村田さんのやつでも、なんかその、特に...耳が聞こえない女性の方、なんかこう...目が、」

森田「あ、目が見えない？」

百瀬「目が見えない」

永田「宙を泳ぐようなショットってのが」

村田「はい」

永田「結構...それぞれ、まあ、挿入されてたりとかして。なんかその...会話と...関係な...関係なくはないんだけど、やっぱりそういうショットを意図的に結構入れているところが。」

村田「うん。そうですね、顔の表情は意図的に、」

永田「うん。」

村田「こう、映すようにしていて、男性の方のセリフというか、話している内容でも、自分が実際に喋っている時に、顔の表情を文法として使って、わかりやすく伝えようとするっていう風に喋っているの、意外と、こう女性の方の人の、顔、顔を見てると...その、彼女は全盲ではないんですけど、あの一...全盲ではなくて、そう...明るいと、昼間だとなんとなくぼんやり、すごいぼんやりだけど、今どこら辺にいるのかっていうのはわかって、」

永田「うんうん。」

村田「で暗くなると、ほとんど見えなかったりとか、その...えっと、顔の表情とか動作とかは全然見えないっていう、事をしゃべっているんですけど。まあ、彼女もその、表情を、他人の表情を見てないからなのかもしれないんですけど...あんまり、こう喋っている時に表情を変えないっていう所がちょっと気になっていて、表情変えてないし、あと、映像の中には入っていないんですけど、私としゃべっている時も、あの一...わら、笑っているときに、あのわら...笑うんだけど、あんまり表情として笑っていないみたい。ん、まあ、愛想笑いなんですけど、その愛想笑いの時の『はははっ』っていう声だけ笑ってて顔が笑ってないみたいなのところがあって。で、そういう、その女性の、えっと...、表情のない表情っていうのを、出そうとは。あの、映像の中には組み込もうとはして。あとはその女性の、見えない状況っていうのをぼんやりとした映像に切り替えることで再現したりとか。」

富井「うん。」

森田「うん。」

末永「うん。」

百瀬「なんか私は、結構なんかその、手って話してる時に結構無意識に動いちゃう...じゃないですか。なんか、今でもこう、こう。」

森田「ふふふ。」

百瀬「何かこう顔はこんなにしょっぱいの、身振りはアメリカンな感じになっちゃうんですけど（笑）」

一同「「（笑）」」

富井「アメリカン（笑） どういうこと？（笑）」

村田「あはは」

百瀬「あはは。何か、こう結構自分の意識してないところで動いちゃう。」

永田「うん。」

百瀬「ぶしょ、ぶしょじゃない（笑）、部位だと思うんですね。だから、結構そこを撮ってみたかったなあーって言う。」

永田「うん。」

百瀬「木下さんの場合だと、喋りながらどうしても、普段手話やってるから、こうして手の動きになっちゃうし。」

永田「うん。」

百瀬「私も人の話聞いてるとき、こうして動いちゃったりとか。」

富井「うんー。」

末永「それは撮るように指示してたの？あらかじめ。」

百瀬「あ、何か後で、そいつは後撮りなんですけど、普通に喋ってる時に、こう、それぞれ。」

末永「あ、後撮りなんだ、あれ？」

百瀬「手のところは後撮りです。」

末永「ふーん。」

村田「なんか、普通にその、元々身振り手振りがアメリカンだと言いましたが、」

百瀬「うん。なんでだろう。」

村田「元々ですかね？」

百瀬「わかんない。でも何か伝えようと思う時は、私はどうしても自然に手が動いてしまう。」

村田「あの映像の中で、普通に喋ってる時は、あんまり手が動いていなかったのに、『こんにちは』から『とんにちは』っていう、その、声が違う声を当てはめて喋ってる時...に、何か、すごい...あの、俄然さっきよりジェスチャーが増えてるなって思って.....たんですよ。」

百瀬「うんうん。」

森田「あー...ストレスが増えてるからかね。」

村田「ふふふ。」

百瀬「あー、そうかしんない。」

村田「手を動かしてたり考えて...回転して...。」

富井「伝わんないことを言ってるっていうのが自覚的になってくると、こう...俺も割りと動くほうなんだけど、こう、いっちゃうのかもしれないね。」

永田「うーん。」

森田「何かさ、その、コミュニケーションの中でさ、バーバル・コミュニケーションとノンバーバル・コミュニケーションって。バーバルは、言語を介したコミュニケーションで、ノンバーバルがまあ...言語を介さないジェスチャーとか、表情とかそういうコミュニケーションなんだけど。なんか...7...バーバルが3で、ノンバーバルが7だったかな？その比率のは本当は忘れちゃったんだけど、ノンバーバル...その...言語を介さないコミュニケーションのぶんがすごい多いんだって。」

百瀬・村田「うん。」

森田「で、しかもなんかその、まあ、一番、なんか...みんながわかりやすいと思っているのは、表情、らしいんだけど、実は、本当にそれが現れるのは、一番現れるのは足なんだって。」

百瀬「へえー。」

富井「足い?!」

永田「へえー。」

森田「それは、あの、脳の中の、」

永田「うん。」

森田「なんかその受け持ってる、部分が、違うんだって。足とかを受け持ってる所は、その、なんか一番原始的な脳が受け持ってる、」

富井「ほうほうほう。」

森田「で、表情とかって、結構、みんななんか、子どもの頃からコントロール...できるように、トレーニングされてて、嫌いな人の前...に行っても、なんか...『ニコニコしてなさいね』ってコントロールされてるんだけど、足とか...だから、上から下がれば下がる程、そのコントロールは行き届かないんだって。」

百瀬・村田「へえー。」

百瀬「要するに無防備ってことですよね？」

森田「そうそうそうそう。」

百瀬「なんかその、まなざさ...まなざされること、に対して、あまりにも無防備であるっていうか。」

森田「そうそうそうそう。」

永田「たとえば貧乏ゆすりとかも無意識でやっちゃうんでしょ、みんな。」

富井「いらいらするとすぐ手が出るとか、足が出るよね。どうしてもこう、ちょっとしたこう、意思表示っていうときに。」

森田「そういうのはなんか、まあ最近ちょっとそういう本を読んでて、なんか面白いなと思ってて、でもなんか、そういう風にも、なんかその、ノンバーバルをうつ、コミュニケーションを映してるように見えるんだけど、ああやってなんかこう、たとえば百瀬さんの手とか抜かれると、その、なんか、ものすごいエロ

い.....じゃん！（笑）」

一同「「「（笑）」」」

森田「マニキュアを塗っててさ、なんかこう、もぞもぞしてて。」

富井「まあ、いろんなイメージは出てくるよね。」

森田「そうそうそうそう。違うイメージがすごい挿入されてて、」

百瀬「でもあのマニキュアけっこう意図的に塗ってます。」

森田「そう、あれ、なんの意図だとうと思ってあれ（笑）。こう、胸あけてるしさあ（笑）」

村田「あと口紅も赤く塗ってましたよね。」

百瀬「あれは、.....もともと。」

永田「でもメイク濃い目にして。」

百瀬「濃い目（笑）。」

富井「まあそらね、ライティングのこともあるんだけど.....最後ほら触れる触れないって話が出て来るじゃない？」

百瀬「あのへんけっこう、みんなからエロいねって皆さんに言われて。」

富井「そういう意味ではこう、男女でもあるし、コミュニケーションの問題でもあって、こう、八でしょ、結婚するときってあの教会とかで八の字で会話しなさいとか言われるんですよ。」

村田「八の字.....？」

百瀬「こういう。」

富井「八の字八の字。」

村田「ああ。」

富井「でも僕は、そういう形式って意外と全部が男女のコミュニケーションと、正しい在り方に、結構はまってるよね。まあインタビューもそういうものなのかもしれないけど。じゃあそこにね、それはやっぱり気づかないんだけど、ちょっとこう、そこに寝そべってるその問題が、あの指がぱって入るだけで、瞬間にぼんと浮上してくるところがある。そういうの意図的？ そうじゃない余剰っていうか。」

百瀬「そこも残してます。なんか、敢えてその、女性であるってことを意識させるようなカットも、意図的に入れてます。そこで、広がる可能性みたいなのを泳がせておきたい。」

富井「それは泳がせておきたいんだ。うんうんうん...結構そういうのって作品では重要だよな。どこまで、ストレートであればいいってわけでもないし、どっかでその、」

森田「そうだよね。」

永田「ちょっと本筋から外れた部分で、なんか思わせるところが。」

富井「そうそう、田中功起くんのさあ、映像とか、ぱっと思い出しちゃった。なんこう、いろんなことをな

んかこうずっとなんだけ.....なんとかのアクションって、ひたすら彼がなんかいるんなことを自分でやるんだけど、いきなりねえ、ある定期的な時間になると料理が出てくる。

永田「うんうん。」

富井「その料理だけがちょっと長いんだよ。料理の他は五秒で済んでるのに、料理だけ八秒とか。それも必ず意図的に入ってるので。あれって別にたぶん、意味はないような気もするんだけど。」

森田「料理ってあれでしょ、なんか台湾のなんか、こう、料理がただ映されてるっていう。」

富井「そうそうそう。」

永田「『Everything is Everything』っていう...。」

富井「そうそうそう、あれ。で、あれは意味はないんだけど、なにか余剰を産むっていうところで意図的に入れてるっていう意味では凄いところがあって。そういうのってなんかやっぱ重要なのかなって思うんですよ。あれはまあ、かなりストレートにやってるけど、まあ、百瀬さんはもうちょっとこう、巧妙というか.....わかりやすいんだけど、まあ、内容が内容だけにちょっと巧妙に入ってる。」

森田「じゃあある意味もう仕掛けてるってところも多いんだ。」

富井「結構仕掛けてるんじゃないかなっていう気は。」

百瀬「（笑）」

森田「女であるってことも含めてね。」

富井「でも自分が映ってるっていうことに対する造形責任ってあるでしょ？」

百瀬「そうですね。」

富井「あの、今回に限らず。」

百瀬「うん。自分の体が映る時やっぱ自分の体で責任とらないといけないと思うし。」

森田「じゃあ、その.....ダイエットでしょ（笑）」

百瀬「そうそう、ダイエット（笑）。」

一同「「（笑）」」

末永「これ配信されるんですけどね（笑）。」

富井「それを思うと、藤井光くんとかを思い出すんだよね。」

百瀬「あー。」

富井「彼の場合は造形責任って言葉をすごい言うんだけど、まあ、それってちょっと意味は違うかもしれないけど.....（笑）まあ、それで言うとね、かなり、藤井くんは自らの身体を律してるんだ。」

一同「「（笑）」」

富井「なんか、それは彼は映らないけど、なんかそういう部分も含めて.....ちょっとね、少し関係ない話になっちゃった。（笑）ちょっとね。でも、造形責任って部分ではなんか、百瀬さんのはものはすごいそれを強

く感じてしまうところではあるかな。」

百瀬「今回テーマがテーマなだけになってことはあるんですけどね。」

富井「もちろんね。」

百瀬「なんか作者の、なんかそれをそもそも作ろうと思った私の体がそこにいないと、全然作品が違うものになってしまう気がして。」

富井「うんうん。」

百瀬「なんかやっぱりそこは、自分の体が責任をとるべきだっていうのは最初からあって。インタビュアーを役者にやらせるみたいな考えは毛頭なかった。最初から。」

森田「逆に村田さんのやつは村田さんって人がいないじゃん。そういうのはどういう風に見えるの？ 造形責任をとった百瀬さんとしては（笑）。」

一同「「（笑）」」

百瀬「いや、でもそこは造形責任って.....」

富井「いやでも、ま、人が出れば造形責任ってわけではない（笑）。」

森田「いやわかってるわかってる（笑）。」

百瀬「私の場合責任ってというのが、例えばその村田さんは個人に対して騙してるわけじゃないじゃないですか。私はやっぱり木下さんに対してどうしても、構造的なうしろめたさみたいなものがあって、だからそこに対する、なんだろう...誠意じゃないけど（笑）、そういったものはすごくある。結構、今回なんかその、倫理的なことを言ってきた人はほとんどいなくて、なんかその、友達とかからなんかすごい、『もう最悪の作品だよ』みたいなメールが来たん、ですけど。一通。やっぱそれは、結局.....なんだろうな、自分たちが、彼らをどう見てるかってことを、露わにしたって言って。結局彼はメールの最後で、なんか、もう、とにかくこう、混乱したみたいな内容、で。やっぱ最終的には、.....お、おもしろいメールだったんですけど。」

富井「まあ、ああいうモチーフって.....モチーフって言い方もおかしいけど、問題ってというか、テーマを扱うとね、まあ、なにを基準に作品を見るかっていうところは、まあ問われはするよね。」

百瀬「だから、私の、い、言うべきこととしては、その、例えばあの作品を暴力的だって言う人がいて、私はそれに対してなんて答えるかっていうと、それは何に対する暴力なんですか、って言うことしかできないんですね。結局その、そこでその人が言ってる暴力っていうのはあくまで耳が聞こえる私の、私たちのなかでしか生じる暴力でしかないわけだし。結局、彼らが聞いている声っていうのは、別に音が出てようが出てまいが全然関係ないことなのかもしれないし。なんか、私たちはあくまでそれに仮初めの意味をつけているだけであって....。なんか、逆にそのことで、こちらが木下さんに理解されてるかもしれないし。」

森田「まあでもそういうところも含めて、やっぱ百瀬さんは、百瀬さんが出てるっていうことで、その場に2人がいて、まあ台本みたいなものがあるにしろ2人が会話してるっていうことは、見る方としては間違いないと思える、から...。ある種そこではちゃんと会話は成立していて、どんな形にしる何を仕掛けてるにしろ、会話が成立してるってことがひとつの前提としてあって、まあ、であるからこそその責任という言葉が発生すると思うんだけど。」

百瀬「なんか、」

森田「あ。村田さんのやつを見る、僕最初になんかその、形式的なのは村田さんの方だっていう風に思ったんだけど、あの、やっぱり村田さんは、ああいう風に村田さんが介して、まあ耳の聞こえない人、目の見え

ない人とコミュニケーションをとってるけど、その自分を抜いて、その2人が、条件だけ考えればコミュニケーションできないような条件に、してるじゃん。」

複数「うん。」

森田「でもほんとにその2人がコミュニケーションをとってるわけじゃないっていう状況を僕たちも把握できるからこそ、すごい形式的に見える。まあ良くも悪くも。」

複数「うん、うん。」

森田「で、それに対してやっぱり百瀬さんは、コミュニケーションをとってることは間違いない。その違いって結構大きい気がするんだけど。その辺に関してはどうですか？どっちでもいいけど（笑）。他の人でもいいけど。」

百瀬「なんかちょっとズレちゃうかもしれないけど、なんかさっき言いかけたことがあって。なんかその、見た、あれを見た友達が、なんか『でも木下さん全部わかってたんじゃないの？』って言ってきたんですよ。なんか、どのときに、百瀬さんはいまズレた言葉を喋ってるなって、わかってたんじゃないのっていうか。」

複数「うーん。」

百瀬「なんか、そう思える表情が私には感じられたよみたいな、とか言ってくれた友達がいて。それ聞いたときに、あ、私も木下さんのことを何も理解してないんだなっていうか。」

複数「あー。」

百瀬「私もまた木下さんが実際にどう思っていたかなんてわからない。」

森田「でもそれもなんかコミュニケーションのような気がするんだよね。」

百瀬「そう。だから結局.....なんかそこで起こっていることっていうものが、どう見えるかっていうことを、やっぱ一番、見たいっていうか。」

複数「んー。」

富井「なるほどね。」

末永「村田さんはどうですか？」

村田「私は.....、」

森田「あ、お父さんとお母さんの作品に関しては、まあおんなじような構造を持っているように見えて、実はちょっと違う、っていう風に思って、お父さんとお母さんの問題っていうのは、村田さん...まあその、なんて言うのかな。2人の間に、明らかな関係があるっていう前提で、その構造が成り立っているような気がするのね。お互いに、なんかその、えーっと、その、まあ、別居？（笑）別居っていうかな、自分たちのシチュエーションのことについて語ってたとしても、2人は関係あるっていう前提があるんだけど、今回の場合っていうのは、2人は全然関係ない...。」

村田「うん。」

森田「でも村田さんはその、両方とも間にいて、で関係させてるように...今回はさせてるように見せてる。」

村田「うん。」

森田「でも前は、関係してるってことは、その、えーと、夫婦っていう関係性は前提としてるから、僕たちもそれは了解してる。」

複数「あー。」

森田「そういう意味では、より今回の方が、形式的って...けなしてるような感じがするかもしれないけど、ちょっとなんかその、違う。同じような構造は持ってるけれども、その2人の関係性は違うと思って。あの、違うものになってるっていうか。」

百瀬「そうですね。お母さんの作品からだったら村田さんのカラダをこちらは想像できるっていうか、そこに村田さんを感じるみたいな。今回の作品は村田さんっていう身体は完全に消去されてるっていうか。」

村田「そうですね。私はこう、私の存在を空間の中で消去する、消すことで、その鑑賞者をあてはめたかったっていうのはあって。」

森田「あー。」

村田「まあ鑑賞者の方がどう受け取るかとか、どう、こう間に入るのかっていうこと...。まあ私がいてももしかしたらそれはできたのかもしれないんですけど、できたかもしれないけど、私は一個人として、その聴覚障害者の方とどう向き合うか、視覚障害者の方とどう向き合うかっていうのを体験したうえで、他の人もどういう風に向き合うのかっていうのを当てはめるために、私の存在はいない方がいいのかなっていうの...。」

森田「(笑) すごいっすね。すごい気使ってもらって。」注) 話題とは関係なく、冨井氏が缶ビールを手渡しているのに反応して

百瀬「なんかその村田さんの立場に見る人を代入するっていう見方だと、なんかその聴覚障害を持った人と視覚障害を持った人の対話っていうよりは、なんか違う構造に見えてくるはずなんじゃないかなって思うんですけど。」

村田「んー。」

百瀬「なんか、そこはどうなのかなって。」

村田「そうですね。んー。対話のようにみ...うーん。その、映像自身も対話には完全にはなってないじゃないですか。だからその、対話のように見える中で、あまり答えにならないかもしれないけど、対話のように見える中で、その見る人個人が...んー...作品を見る人も、その男性、聾者の男性と盲者の女性とも対話することができないけど、どういう風にこう受け取るのかっていう...ところですかね。」

百瀬「うん。」

森田「なんかやっぱり間に、その村田さんなり誰かの身体っていうものが介入するっていうのが前提になってる。」

村田「うん、そうです。」

森田「でも僕はあんまりそこに、代入...自分の人体を代入できなくて。」

村田「んー。」

森田「だから...でも、それが、僕が代入できなかったとしても、面白いことはなんか発生してるっていうか、

単純に目の見えない人と耳の聞こえない人のコミュニケーションとしてどういうものが、なんか、成立するんだらうなっていうことを...は、すごい興味を持ったんだよね。逆にね。」

一同「うーん。」

富井「うーん、あんま人は...そうだね、村田さんの場合なんかあの...想像だよ、森田君と同じ感じかな、うーん。」

末永「そろそろちょっと時間が...いい時間になってきたんで...。」

富井「どうしますか？」

末永「どうしますか？（笑）。」

森田「末永君が、」

末永「え？（笑）」

森田「まとめて...。」

末永「え?...まとめんの？俺？（笑）。」

森田「まとめるとかできないの？」

末永「（笑）うーん、までも、ね、いい話ができたんじゃないかな？そもそも（笑）...あのー（笑）、僕に映像解析能力がないんで、こー、みんなに順に、こう話してもらって、いいとこ拾えたらいいなーってくらいな（笑）、動機だったんだけど、思った以上のこー...。」

富井「永田さん、なにか、どうですか？」

永田「いや、なんか、ほんとうに なんていうのかな。やっぱ二つの作品を今日一緒に見て、面白かったのは、森田さんが言ってた、まさにそういう部分で、その、なんか...動機とそのアウトプットの部分が、二人ともなんかこう、まさに交差しているような状態になっているのとか面白かったのと、あとやっぱり、これはま感想になっちゃうんだけどー、二人の作品を見て思ったのは、やっぱ私たちが普段のコミュニケーションによって、どれくらいの割合で視覚に頼ってて、どれくらいの割合で、ま、聴覚に頼っているか、なんか普段のそのコミュニケーションの中でどれ、どういう風に私たちが、なんか、インプットをして、アウトプットをしようとしているのかとか、結構そこらへんを自覚させるのか、なんかまあ、二人の作品は私は面白いと思った。」

一同「うーん。」

永田「うーん、感想ですね。」

末永「いいまとめです（笑）。」

一同「（笑）」

永田「だからこそ、末永さんがなんか結構気になったんじゃないかなと思って。まあ...、その辺は...、」

百瀬「やっぱ、私が一言言いたいなと思ったのは、なんかこのポッドキャストが、結局彼らには音は聞くことができないうってことが。」

永田「そうそう！」

富井「うーん、そうだね。」

百瀬「すごいなって...。」

末永「そうだね」

百瀬「すごいというか。」

永田「うんうんうん。」

百瀬「なんか...。」

森田「じゃあ、文字おこしするか。(笑)」

村田「そう私...筆談で対談してみたいなと思ったんですよ。末永さんから話を聞いたときに。」

永田「あ〜。」

富井「あ、これを？」

村田「そうです(笑)。」

富井「その辺が難しいんだよね。」

末永「そこは自分の作品としてやってください(笑)。」

一同「(笑)」

富井「じゃ結局、ま、こういう話をしてても、ポッドキャストとかもそうですし、まあ、まあ、作品自体ってものが、とはいえ結局、ま、見て聞くことができる人間前提に作られている作品の限界みたいなものとか、それを取り巻く芸術の限界みたいなものとか、あるよね。なんかね。イルコミュニケーションっていう問題を扱うとしても、結局それに、を、二人で映像を使っているってところがまさにそれでさ、絵だったら見ることができる、聞かなくても大丈夫、とか、」

百瀬「そうですねー。」

富井「あるんだけど...。」

百瀬「ちなみに私今回ろう者、ろう者の人が見る用のテキストを持ってきて、一応用意は...」

一同「お〜!!」

百瀬「実際に音として、出てる音を文字おこしたものを、テキストとして用意はしていて、」

永田「うーん。」

富井「なるほどね。そうなるとまた。」

百瀬「それが、果たして経験として一緒かどうかわからないけれど。」

富井「うんうん。」

森田「ぼくもなんか、このあいだ現美で、あの一、アートと音楽展に、ま一見に行ってた時に、あの一そういう目の見えない人が美術を体験できるようにサポートしている人っているじゃないですか、」

村田「あー、うん。」

森田「その二人組みたいなのが、こー、え、絵を、つまりその一、サポートしている人は目の見えない人は絵を見ることができないから、それを言語化しているんですけど（笑）、それが...（笑）ま、うまいのかもしれないけど、すごっ、俺らが見たら結構パツて見えるようなものを、もー、なんかものすごく言葉を積み重ねて（笑）、」

永田・村田「うーん、うーん。」

森田「えー、でも言い切れないじゃん、絵って。ふくざ・・・、視覚的な情報を言語に置き換えられないから（笑）、だからその、サポートしている人も『まあなんかそんな感じ...?』（笑）みたいなのに最後なっ
てて（笑）。」

一同「（笑）」

森田「こ、この、この、これを聞いて、でもこれは再現できないだろうなと思って。」

永田「うんうん、そう」

森田「ん、だから全然違う多分体験すごいしてるのが、すごい奇妙な...。」

永田「そうね、全ての人が、だから、等しい体験ていうのはできてなくて、もう...。」

森田「でも、ズレがすさまじいと思うのね僕は。そこで起きてるズレってのが。」

永田「それはあるね...。」

富井「彫刻でもそうですね。目の見えない人のためのギャラリーってのがあるんだけど。」

永田「あー。」

富井「そこでやられている彫刻展ってのは本気の新作彫刻ってのをやるわけ。大竹伸朗なんかも作るんだけど、これ全部触っていいわけ。でも触っていいことって、見てることと同一になるのかってのはやっぱ違和感があるし、同時に耳が聞こえない方が見てる時って無音でしょ？」

永田「うーん。」

富井「無音の中でもものを見るっていう体験と、無音じゃない中でもものを見る体験ってのは違うと思うわけよ。それは絵でもそうかもしれないし。だからほんとに体験っていうものを、実は、あの一、美術作品とかっていうと、なんかこう、一個のものってというのが、絶対的なものの体験がこう主になっているように見えるんだけど、実は全然違って、ものすごく何階層にも、その辺が起きてるってことだよな。」

百瀬「すごい余談なんですけど、私木下さんの部屋で撮影したんですけど、木下さんの部屋にCDとスピーカーがあって『へっ?!』っと思って、およそ想像していなかったものがあって、『これどうするんですか?』って思わず聞いちゃったんですけど、なんか、こうやってスピーカーに触れて、その振動を聞いちゃって言った。」

村田・永田「へ〜!!」

百瀬「すごい衝撃でしたね〜。」

富井「すごいね。」

百瀬「だからいっぱいCDがあったんですよ。」

村田・永田「へえ〜！」

森田「まあね、音って振動だから、ある意味、僕らはま、違うものとしてとらえているかもしれないけど、同じものとして...、」

百瀬「...そうですね...。」

森田「質的にはね...。」

富井「まあ、それもだから同じものとして成立してるんじゃないの?...ね?...あ、やめたほうがいい？」

森田「いやいやいやいや（笑）...。」

富井「同じものとして出発しているのに、実はみんな思い方が違ってて、でも、じつはそれはここでも全部違うことが起きてて。」

百瀬「そうなんですよー。」

富井「ま、そういう意味で体験ってものの普遍的な体験の齟齬ていうか、齟齬と、その齟齬を求める、齟齬をまー同意させるってことを、あでも、同居できないと知りながら同居させようとするっていうのをね？」

百瀬「だから結局そのそれが、木下さんの映像の中で、実は人と人とは交わらないようにできているっていう、そのものだと思うんですけど。」

森田「ぼくらはその木下さんの話が、これ、面白すぎて、自分の経験と結びつきすぎて（笑）、特に2回目、今日みたいの、すごいうち思ったのね。」

一同「うーん（笑）」

森田「でだから、ある意味で1回見たときは、百瀬さん何を仕掛けてるのかっていう方の強烈さがあったんだけど、2回目は木下さんの、」

永田「内容が...。」

森田「話が強烈さ（笑）がすごいあって、だから、逆に百瀬さんが仕掛けてることに対して、すごいうちイラしたの（笑）。」

百瀬「（笑）」

富井「また、最後そういう（笑）。」

森田「（笑）イヤイヤ、悪い意味、悪い意味じゃないんだけど。」

富井「作品ってもののありかみたいなお話になるのかなって、今回、こういうこと、ま、ずらせばね、そういう美術的に言えば、なんか、そんな気がするけど。作品てのは何を元に成立してて、なぜ人は見るのか、なぜ作るのかってとこって、今言った話に結構集約されている気がする。」

永田「うーん。」

富井「体験がずれるからこそ、まあ見るし、その結局交じり合わないんだけど、交じり合わないから、じゃ交じり合わないのかって話。」

永田「うんうん。」

富井「じゃ、なぜ交じり合うのか。」

森田「交じり合わないからこそやってけるってことあるからね（笑）。」

富井「そう、そこをなんか前提にして、こういう全てにおいてポッドキャストからなにから作品から何から成立してんのかなーっていう。おおざっぱにいうと（笑）。感じはするけどね。」

森田「絶対的な価値みたいなものが成り立たないようなところで、僕たちは生きているんだなっていう（笑）、だからこそ生きていけるんだなてことを知れたっていう...。」

富井「それから、」

永田「ほんとにわかって?...（笑）」

女性「（笑）」

富井「ただそれにフラットな作品を【落としこめてる】人たちが、」

（音楽）

富井「大学を卒業するところを出せてるってのがすごいなと思ったのね。なんか、思いながらやってないみたいなことあったじゃない...(声：フェードアウト)」